

災害一般

弘化・嘉永の世情

大島直珍日記 嘉永七年「一八五四」一二月
此度大火珍敷事にて、京都も大に淋敷、商売人も渡世ニ困リ、其上異国船等にて万事不融通にて上下不_レ残困窮、悪舌ノミ、田舎等も同様六ヶ敷甚及_二迷惑_一、作物も格別出来間敷とも相見え候事（中略）天災之事人力ニ及不_レ申候事

寛喜大飢饉

民経記 寛喜三年「一二三二」四月六日
餓死に依る死人、道路に充滿す、哀れとすべし

猛暑の上洛

資勝卿記 孝亮宿禰 寛永三年「一六二六」五月二十八日
記 鴨脚豊秀日記
近日、炎旱、殊に甚し、民戸悉く憂う

早魃

風水害

公家邸宅の衰亡

皇年代略記 建保四年「一二二六」八月二十八日
大風、外記庁官庁已下顛倒す

市街の周辺地域への拡大

百練抄 建保五年「一二二七」一月十日
上皇（後鳥羽）、水無瀬殿新御所に御移徙す、是本御所去年大風洪水の時、顛倒流失の間、更に他所を点じ造営せらるる所なり

気候・気象災害一般

米価高騰と町民の困窮

日要記 天保四年「一八三三」
此節米高値に付、山城国在々百姓共米貯居候者有_レ之候はば、京都米商人共へ直段相對にて随分下直に可_二売出_一候、尤新米も取入次第、不_二貯置_一、早々可_二売出_一候

米価高騰と町民の困窮

事々録 天保五年「一八三四」
京師市中糧米には大根芋の類を飯中に焚入候て露米をつなぎ候者ども多く、餓死に至り候者も粗承り及び候

冷害・雪害

農業恐慌

京都市農会長松田庄五郎の昭和七年の年頭所感「京都市農会報」
米作は夏期の冷涼と日照の不足から平年作以下の不作で、（中略）昭和五年度の市内作付反別が三千九百九十町歩に対し、九万八千六百三十七石で、（中略）、平均反当り二斗五升の減少である。また、蔬菜の価格は米価の低落によつて他に収入を求むべく転換したる者ある為、蔬菜の生産過剰を来し、剩へ気候の温暖によりて増収と成り、加へて消費量少く、自然価格は低下するのみで、農家収入の激減を招致したものである。

公家邸宅の衰亡

百練抄 承久元年「一二一九」七月二十一日
辰の刻より大風、神祇官南庁・右近馬場の屋顛倒し了んぬ

橋梁の造営と河川の修理

百練抄 安貞二年「一二二八」七月二十日
風吹き雨沢う、洪水泛溢す、四条・五条等の末の橋流れ了んぬ、漂没の輩数輩と云々

安政・文久の物価上昇

大久保家文書 万延一年「一八六〇」十月
藪地又ハ梨子、柿其外之菓類を仕付て、其間々_江ハ大根蒔付相統罷在候処、右藪地之義先年より自然枯ニ付、漸此節立木掛、当年仮色ニ筈出生之折柄、五月十一日之強風雨ニ而不_レ残吹倒レ、勿論梨子・柿其外菓類も右十一日、猶又七月以來

之強風雨ニ是又立木迄も吹倒し候次第ニ御座候

慶応の米価急騰

西村善雄家文書 慶応二年「一八六六」八月七日
 当寅年田作之儀、其以来兎角不順^三而中稲・晚稲共益後ニ至
 り候^四出穂悪敷、如何御座候哉、日夜心配罷在候処、去ル
 七日夜中晝ニ至、暴風雨ニ而村中之田作一円吹荒、何共可^レ
 申様無^二御座^一

善政

昭和初年の土 慶応四年「一八六八」一月
 地の古老の話

慶応四年正月が伏見鳥羽の戦で、ビクビク肝を冷やさねばな
 らなんだ。それに引き続いてこの大水だ。(中略) ちょうど
 四月上旬から大雨が降り続いて、淀川木津川が大いに増水し、
 大池はおよそ一丈八尺余りの増水だ。とうとう五月十二日丑
 の刻(午前二時)宇治橋の下流、いまの桜井の池の堤が二百
 間余りも切れ、さか落しに押寄せてきた。流水は当時宇治橋
 の本にあった橋姫神社を押し流し、槇島村を浸してエンバ堤
 を巨椽大橋の上手で切り、小倉の北では橋本町の定右衛
 門・三四郎・与吉・卯右衛門・万吉・熊右衛門・幸右衛門・
 寛右衛門・茂平治・文七都合十軒が流され、三四郎のお仲婆
 さんはクズ屋の家といっしょに大池へ流され、大声あげてい
 たのを、助け船を出して破風より助け出した。

戊辰の淀

都鄙新聞第四号 慶応四年「一八六八」
 淀城中一円ノ水中ト成リ淀橋流レ落チ所々堤切レモ有^レ之

災害のなから

京都日出新聞 昭和九年「一九三四」九月
 暁過ぎから近畿地方を襲うた空の大魔王、猛台風は狂ひに狂
 ひ暴れに暴れ、募る狂暴さは午前八時半に至つて、風速実に
 二十八メートル、京都付近を突いて当地未曾有の烈風となり、
 看板を吹き、電柱を倒し、屋根を剥ぎ、家を飛ばし、倒壊家
 屋は無数、死者、負傷者続出、殊に淳和、西陣、八幡、朱雀
 第七等々小学校の崩壊は、授業開始の間際のこととて幼き者
 の死亡は百に垂んとして、悲惨眼も当てられず。

土砂災害

京外への道

日本紀略 天曆三年「九四九」五月二十二日
 近くは曾て粟田山路俄かに以て頽破し、已に損害をなす、車
 馬の往還甚だ煩い多し、官使を差して実検を加うべきの由、
 宣旨を山城国に給う

橋梁の造営と河川の修理

山槐記 元暦二年「一一八五」七月九日
 午の剋、地震う、五十年已来未だ覚悟せず、(中略) 後に聞く、

地震災害

宇治橋皆以て顛倒す、時に之を渡る人十余人橋に乗り水に入
 る、其の中一人溺死すと云々

市街の周辺地域への拡大

花園天皇宸記 正和六年「一一三二」一月五日
 後に聞く、地震の間、人家或は顛倒すと云々、白河辺り五人
 死者ありと云々、元暦以来此の如き地震未だあらざる歎、近
 代未曾有と云々、正応の関東大地震は数日と云云、其の時尚
 此に如かずと云々

慶長の大震災

義演准后日記 慶長元年「一五九六」閏七月十三日
 伏見の事、御城・御門殿以下大破、或は顛倒、大殿守(天守)
 悉く崩れて倒れたぬ、男女御番衆多死す、いまだその数を知
 らず、其外諸大名の屋形、或は顛倒、或は相残るといへども
 形ばかりなり、其外在家のていらく前代未聞、大山も崩れ大
 路も破裂す、ただごとには非ず

慶長の大震災

増補家忠日記 慶長元年「一五九六」
 上臈女房七十三人、仲井(居)下女五百余人横死す

慶長の大震災

言経卿記 慶長元年「一五九六」閏七月十三日
 一、寺内ニハ門跡御堂(本願寺)、興門御堂(興正寺)等顛
 倒了、両所ニテ人二、三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、
 死人三百人ニ相及了、全キ家一間(軒)モ無^レ之